

報告 2

ワークショップ in 韓国 2005^{注1}

学習者の主体的な自己表現をめざす日本語教育
「総合活動型日本語教育」へようこそ

鄭 京姫・早稲田大学大学院日本語教育研究科 言語文化教育研究室（編）

1 はじめに

今回、韓国でのワークショップは「学習者の主体的な自己表現をめざす総合活動型日本語教育」というテーマで、8月31日釜山（於 釜山外国語大学）、9月1日光州（於 朝鮮大学）、9月3日ソウル（於 国際交流基金ソウルセンター）等、韓国を代表とする3都市で行われた。

ワークショップは、まず、細川から、「総合活動型日本語教育とは何か」のテーマで、なぜ「文化」と「社会」の統合を考えるのか、という話題提供が行われた。次に、ビデオ^{注2}を視聴し、その後は、各グループでディスカッション、最後には質疑応答を含む問題や意見の交換などを全体討論で話し合いを試みた。

2 釜山でのワークショップ

釜山外国語大学では、日本語教育大学院生、釜山市内の大学で日本語を教えている日本語教育関係者が多く参加した。

今回、釜山外国語大学では、司会を務めてくださった、鄭起永先生の全面的な協力を得て行われた。

- ・ 日程: 2005年8月31日(水)
- ・ 於: 釜山外国語大学
- ・ 司会: 鄭 起永先生
- ・ 時間: 10:10 - 12:10

10:10 - 10:15 開会・挨拶

●東洋語科の科長、金先生からのご挨拶

このたび、うちの学校でこういうすばらしい研究会を行うことを本当に心から感謝いたします。まず、この教育関係は、特に釜山は韓国国内で一番人気があるか、あるいは、まあ、言葉を変えると、非常に留学率が高い学科の中に教育関係です。これからもまた教育のイメージ、あるいはその伝統と言うか、それあると思いますけど、このたび、皆様こういう研究会に参加したことをもう一度感謝いたします。ありがとうございます。

10:15 - 10:40 講演

細川より、日本語教育と「社会」「文化」の問題をどういうふうに統合するか、という今回のワークショップの目的を、「総合活動型日本語教育とは何か」というテーマで話題提供が行われた。

10:40 - 11:10 ビデオ「考えるための日本語」視聴

2003年3月製作された早稲田大学日本語センターの「総合3-7・8」の教室活動を記録したものである。この総合活動型日本語教育は、学習者の興味・関心を、教室での他者との対話を通して学習者自身が言語化し、レポートにまとめていく過程での日本語習得を目的としたものである。

11:10－11:25 グループ・ディスカッション

各グループには、早稲田大学大学院の院生が入り、先生の講義の内容やビデオをみてよくわからないところや反論、疑問などの意見交換の際、話が進んでいけるようにサポート及び記録を取るなどの役をした。

11:20－12:10 討論（質疑応答を含む）

Q1：こういう活動では、評価をどのようにしていますか。先ほどのビデオを見ると、言語形式についてあまり触れていないが、フィードバックはあまりなかった。評価について学生の発言の論理性とか、一貫性とかを見ますか。それだと、レポートがある程度一貫性があると、みんな A＋になるのか。どのように評価していますか。

細川：評価については、中にもありましたように、三つのポイントがありまして、テーマを自分の問題として捉えているのか、それからインターアクションの受容、つまり教室活動とグループ活動のインターアクションを十分自分で受け止めているのか。それから、もう一つは動機から結論に至るレポートの論理の一貫性です。この三つだけです。この三つを一番最初の日に出します。これを評価するんだという方針を明確に出していて、この方針にそって13週やり続けるんですね。最後に相互自己評価会があって、他者のレポート、そして自分のレポートについてこの3点から評価します。それを全員でやります。先ビデオの中にも相互自己評価会が出てきました。一人一人はレポートをよく読んで、コメントし、それから、点数をつけて、その評価がほぼ自動的にそれぞれの評価になります。大学に提出する成績になります。それでいいのかどうかはまた次の問題ですけれども。そこではこういうふうには評価しています。いまプリントにあるようにそれは一番大きな問題で、なぜそう言う今言った三つのポイントから評価するのか、しかも相互にやるのかという話をするべきです。それをやりだすと、ものすごく時間がかかります。文法的な

誤りいわゆる文法的な誤りについてはそこでは一切問題にしません。なぜ問題にしないのかというと、それは基本的にできるだけ対等な関係の人間関係を作りたいからです。そこでどちらが母語話者で、どちらが非母語話者だという関係を持ち出して、あなたの日本語がおかしいなんか言ったら、そこで人間関係が作れないじゃないですか。社会をつくるためには、どっちがうえでどっちが下でという関係をできるだけ、なくすようなそういう理念に基づいて、だから、そういう理念を妨げる要素をなるべく排除していく。だから、誤用訂正ということはここでは問題にしません。ただ、言っていることがわからないと困るんですね、だから、何ですか、どうしてですかという質問はします。

Q2: 相互自己評価会で自分をよく評価する、いい成績をつけることがありますか。

細川: あります。それはもう人さまざまで、非常に自己に厳しい人もいて、他者に厳しい人もいます。それは一緒になってコミュニティができるという前提で、だから、こうしなければいけないという決まりはありません。ですが、レポートを完成することということ、レポートを出すこと、それから、相互自己評価会にきちんと参加すること、この三つをクリアしていくと全員に成績を出すという宣言を最初にします。百点はつけませんけど、要するに、80点から90点の間の差であるということです。だから、最低落ちてここから下は落ちないよという網を最初からかけてある。日本人のクラスでやることもありますが、その時はその網をかけないこともあります。それはまあ、その場その場でやって多少違ってきます。

Q3: 誤用訂正について伺いたいですが、グループの中にもこの活動の中では誤用訂正は一切していませんね。

細川: それはカッコつきの誤用訂正ですね。

Q3: はい。そうなのですが、一人一人は自分の意見を表現する活動のなかで表現することは習得していくと思いますが、先生は非明示的な方法でそれだけでその合意が進んでいくと考えていますか。

細川: 非明示的というのは誤用についての非明示的ということですか。

Q3: その文も、言い方、文法、文型とかそういうことを学ばずに、活動の中でしっかり最後自分の意見を述べる過程で日本語自体も自然に上がっていくということですか。

細川: 語彙や文法・文型や発音もそうですが、基本的には僕は文脈なくして習得はできないという考えです。文脈なく取り出して、また文脈に戻そうとすると、必ずそこに齟齬が起きます。だから、文脈から取り出すこと自体が僕は問題だと思う。基本的には文脈の中でしか習得はできない。だから文脈から絶対切り離さないということです。

Q3: その中で例えば先生は、ここの語彙表現はもっといい例があるとか

細川: ああ、そのバリエーションを出すこと。リーダーやサポーターがいろいろなバリエーションを出すことにあります。それを最終的に学習者は選択していくことはむしろ非常に頻繁です。わたしだったら、こういうけど、こういうふうに言ったら、こういうニュアンスになるだろう。じゃ、どっち選ぶ? という話があって、自分はこういうニュアンスで使いたいから、じゃ、こっちにしようかな。もっといい表現はないですかとか。そういうようなやりとりはまあ日常的にというか、まあそんなことしかやっていないと言えそうかもしれません。だから、その文脈が出来上がるのは非常に重要だと思います。そのためには文脈というのはたとえば、郵便局に行って切手を買いましょうという場面設定ではありません。やっぱり自分のやりたいこと、したいことがベースになっていて、そこで本当にやっぱりここで私は書かなければいけないんだ、言わなければいけないんだという設定がない限り、なかなか文脈化が起きな

いと考えています。ですから、そういう状況に持っていく設定が必要ではないかなと思います。

Q4: 自分の考えを表現するのもすごく大事な授業と思いますけど、初級の後半と上級はすごくレベルの差があります。レベルごとに教室を分けなくて、一つの教室でいろいろなレベルが存在して、一緒に授業をするのは先生がどう考えています？

細川: 人間には別に初級だから、人間的な能力が劣っているとか、幼稚であるとかというのはありえない。これは多分みんなが同じだろう。たまたま言語経験が少ないから、そうになっているだろう。というふうにまず設定するわけですね。その時に、言語経験というのは多ければ、結局はしだい次第にこう積み重ねていくわけですから、結局ここは言語経験の少ない人と言語経験の蓄積のある人は一緒にやるかどうかということです。しかし、話題になる問題についてはそれぞれ自分の中に考えていることですね。ですから、それについて、つまり言語経験がないから、その共通の言語としての、ここで言えば、日本語ですが、日本語で言い表すことができない、で、そこでストレスを感じる人はたくさんいると思いますね。しかし、それは単に言語経験が少ないだけであって、決してその人は考えていないということではない。むしろ、言語経験の豊富な人は言語経験のない人に対して、ここにはこういう言い方があるじゃない。こういうふうに言ったら、あなたの言いたいことはこういうことというふうにやり取りは十分できる。だから、言語経験の多い、少ないはなるべく混在したほうがいいというふうに私は考えています。今の段階では。この段階ではまだ迷いがあって、3・4グループとか、5・6グループとか分けています。理論的に考えていくと、やっぱりナンセンスかなと。最近思い出して、これ以降2003年の4月から、このグループわけを解体し

て、好きなように集まって、好きなようにやりなさいというふうになっています。いかがでしょう。疑問は水解しましたか。

Q5: 私の疑問と言うのは、総合的な文化教育というのは全般的なもの、また自分の考えを表現し、他者の考えを聞いて、お互いの共通点と違うところお話をしながら、自分の考えていなかったもの、また新しい考えとかを全部途中の流れに入っていますけど。

私の立場としては高校の教師ですので、高校の現場で総合的な日本語教育を行おうとしたら、どういう形で、また特別な形式があるのかという疑問です。二年前から、日本文化教育について考えて、ただの簡単な文化要素だけを教室の現場に入れて教えていますけど、このような形でこれからも私も教えたいと思っていますけど、特別な方法で、高校生のレベルは低いので、先生の考えをちょっとお聞きしたい。

細川: そうですね。高校でも、大学でも、民間ボランティアでもどこでも同じです。僕の立場としてはね。高校だからこうだというふうとは僕は考えません。ただ、それはいろいろな方のさまざまな問題があるだろうと思います。というのは、なぜ僕は今こういうところにいるかというと、日本語教育や日本事情教育の歴史を見た時に、1960年代から、最低、教えるべきものをピックアップするという試みをしていたんですが、何一つ成功していないですよ。つまり、文化全般を捉えるということは人間にとってたぶん不可能なんですよ。だから、その不可能なことをやろうとしても、それは矛盾しますから、それは私にはできない。むしろできないという立場から始まっているわけです。そして結局は自分の中の一人一人の経験、つまり文化イメージをどういうふうに考えていくかといふところに終着せざるを得ないわけです。その歴史にしても、客観的な、まさにもう誰でも揺るがすことができない客観的な事実としてあるのかもしれない。しかし、それを受け止めるのは、それは客観的な事実とし

て人間に入ってくるわけではない。それは主観として入るわけですから、イメージとして入るですから、で、そのイメージは一人一人が持つしかない。もちろん、じゃ、客観的な事実だけを教えればいいんだという立場もあると思います。それは一つの立場だと思います。それについてはわたしもちろん否定もしません。もちろん。ただ、その言語活動というものを通して、いろいろなことを考えていく活動の中でその客観的な事実を提示して、ただそれを覚えろというのはなじまないということです。それはだから、最終的に決めるのは受講者一人一人の問題なので、基本的にはその場を提供するということしかできない。その材料そのものも提供できない。

Q5: 高校現場では今まで文化要素だけを入れて教えていますけど、文化要素とコミュニケーションを繋げて教えなければならないと私は感じていますが、

細川: だから、どなたが決めたんですか。

Q5: 決めたじゃなくて、ええと、外国語の最初の目的は

細川: だから、それは誰が決めたんですか。

Q5: 実は韓国では教育目標がありますけど、高校の教師としてはなんかいろいろな目標を目指して教えていますね。

細川: ですから、現場からやっぱり現場の実践としてこうあるべきであるということをごんごん出していきしかない。こう決まっているからこうしなければいけないというふうを考えるのは、逆に高校生に向かって、あなたはものを考えるなというのと同じことですから。高校生にものをよく考えなさいと教えるんだったら、やっぱり高校の先生も一生懸命考えないといけませんね、だから、文化要素を僕は別に否定はしてませんが、それは本当に文化要素と言えるのかどうかという吟味が必要だろうということです。おそらくそれは人によって少しずつ違ってきますよね。取り出し方がね。その時に、じゃ、それをどういうふうに議論していくの

かということは重要だと思います。私の立場としては、そういう文化要素というものを取り出すことができないという立場です。ですから、よって立つところが違いますよね。私はあくまで「私」の問題として取り出すことができないと考える。だから、どうするかというところから出発している。だから、高校でやろうと、大学でやろうとそれは私の場合、まったく関係ないということです。

Q6:授業をするとき、ビデオ、ドラマを見ながら、生徒さんよく寝るんですよ。そういう時、どうしたらいいですか。

細川:それは面白いドラマにしたらいんじゃないですか。

Q6:面白いドラマをするときはね、またいろいろ反応違うと思いますが。教育関係では面白いドラマよりも、明治時代あたりのドラマもありますね。それをやる時はよく寝るんですよ。

細川:それはやっぱりそのビデオ製作者の問題かもしれません。

Q6:それは製作よりも、先生の場合は、またとめて質問をしたりするそういうやり方があるんですね。

細川:それはあるでしょうね。

Q6:寝る時、ここまでします。みんな質問してくださいとか、そういうやり方がありますね。

細川:それはテクニックの問題もありますけど、先のビデオですけれども、やっぱり30分ずっと聞き続けるのは辛いという場合もあります。そういうときは例えば、間にマイクでコメントを言います。そうすると、集中します。人間の集中というのは20分しか続かないので。それ以上のものは延々とやらないほうがいいだろうと思います。テクニックとしてはそうだろうと思います。そろそろ時間になります。一分だけ、一応締めをやりたいと思います。先に私の立場を一応説明しましたが、言葉を学ぶとは何かということで、やっぱり思考と言語の往還ということは大事

ですし、それから、「個の文化」という立場からいうと、自文化と他文化という関係、これが重要だと思いますし、その関係を良く考えるために、やっぱり強固で柔軟な「個の文化」の形成を目指すというあたりは私はポイントになるのではないかと思います。学習者一人一人もそうですし、教師自身もこの問題は重要ではないかと思っています。一番最近書いたもので『日本語教育126』に「実践研究とは何か—私はどんな教室を目指すのかという問い」という論文を書きましたので、参考にしていただければと思います。ということで、今日はどうもありがとうございました。(拍手)

12:10 閉会

司会：今日は総合型日本語教育それから考えるための日本語という授業パターンを見て体験することができたのではないかと思います。その意味で皆さんの教室でいろいろ生かして活用していただければと思います。(中略)この後、食事の後に、キャンパスのツアーがありますが、大体建物を回っていただいて、日本語学部のほうにもすこし見ていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

3 光州でのワークショップ

光州の朝鮮大学で行われたワークショップは、主に、大学の学部生、大学院の修士課程の学生の参加が多かった。

今回、朝鮮大学では、司会を務めてくださった、金仁炫先生、朴青国先生の全面的な協力を得て行われた。

・日程：2005年9月1日（木）

・於　　：朝鮮大学

・時間：10:10－12:00

・司会：金　仁炫先生

10:10－10:15　開会・挨拶

細川：早稲田大学日本語教育研究科というところから来ました細川と申します。今日は私が早稲田大学でやっている授業のビデオをお見せして、そのビデオについての感想や意見を皆さんからもらいたいと思います。講義ではなくワークショップですから、グループに分かれていただいて、それぞれビデオについての感想、それから皆さんが今勉強している日本語の勉強の仕方とか、ビデオとの違いとかそんなことをいろいろ話し合っていて、意見をまとめて下さい。それはあの、前に座っている日本語教育研究科の大学院の人たちがコーディネートをしてくれますので、それに従って、自分の考えていることを発表して下さい。

10:15－10:35　講演

細川より、日本語教育と「社会」「文化」の問題をどういうふうに統合するか、という今回のワークショップの目的を、「総合活動型日本語教育とは何か」というテーマで話題提供が行われた。

10:40－11:10　ビデオ「考えるための日本語」視聴

今回は、釜山でのワークショップより、ビデオの内容について詳しく紹介を行った。ビデオの中の教室活動の枠組みについてもビデオを見る前に説明することによって、参加者の興味を沸かした促進剤となった。

11:10 – 11:30 グループ・ディスカッション

各グループには、早稲田大学大学院の学生が入り、先生の講義の内容やビデオをみてよくわからないところや反論、疑問などの意見交換の際、話が進んでいけるようにサポート及び記録者の役をした。

11:30 – 12:10 討論（質疑応答を含む）

12:10 閉会

4 ソウルでのワークショップ

ソウルでは、同徳女子大学の李 徳奉先生をコメンテーターとして迎えて行われた。

今回、ソウルでのワークショップの会場であった、国際交流基金の二緑ホールは、100人以上の参加者の熱い議論で盛り上がった。

- ・ 日程: 2005年9月3日(土)
- ・ 於: 国際交流基金 ソウル文化センター 二緑ホール
- ・ 時間: 14:00 – 17:00
- ・ スケジュール

14:00 開会

14:00 – 14:30 総合活動型日本語教育とは何か(細川英雄)

14:30 – 15:00 ビデオ「考えるための日本語」視聴

15:00 – 15:15 休憩

15:15 – 16:15 討論（質疑応答を含む）

16:15 – 16:30 休憩

16:30 - 17:00 ライブ対談（李徳奉＋細川英雄）

17:00 閉会

細川より、問題の設定の理由と、その理論的な背景の説明があった。それから、教室活動のビデオを視聴し、その後は、討論に入った。会場は多くの参加者で、グループの規模も8-9人くらいで大きく、始めて顔あわせの方々が殆どであったが、各グループに早稲田の大学院日本語教育研究科の院生がコーディネーターとして入り、そのコーディネーターを中心としながら各グループの中で20分か30分程ディスカッションしていき、その後、各グループの討論を全体にまとめた。

その後、3番目のセッションとして、李徳奉先生と細川のライブ対談が行われた。李徳奉先生には今日の細川の理論的説明およびビデオ、それから、全体の討論を踏まえたコメントをいただき、さらに、それをもとに李先生と細川の間で対談の時間が設けられた。又、最後の10分間ぐらい、フロアーから意見をいただいて、細川と全体で討論が行われた。

14:00 開会・細川の挨拶

挨拶：今回、この企画をいたしました早稲田大学の細川と申します。（拍手）

今日は、国際交流基金のご協力を得て、このような立派な会場をお借りすることができました。感謝いたします。それから、今回は特別ゲストとして李徳奉先生においでいただきましたので、ご紹介いたします。（拍手）

ワークショップはタイトルとしてはなぜ文化と社会の統合を考えるのかという話題を提供したいと思います。ひとつの解答を得るのではなく、それぞれのここに参加したみなさまがどのような教室をめざすのかという問いを持っていただきたいということです。おそらくビデオを中心として議論がわき起こると思いますが、いろいろなご意見、立場、いろい

ろな感想があると思います。けれども、いちばん大切なことは私たち日本語教師一人一人がどんな教室をめざしていくのかという理念と申しましょうか、考え方のことであろうと私は思っています。それを今日は十分議論する時間を作りたいと考えました。

14:00 – 14:30 「総合活動型日本語教育とは何か」(細川英雄)

今日のワークショップの理論的背景と申しましょうか、私のほうからの問題提起として少しお話をさせていただきます。20分ぐらいで済ませたいと思います。ご辛抱ください。

今回なぜ社会文化との関係を日本語教育という文脈の中で考えなければならないのかというひとつの歴史的課題としてあげたものが、今見ている日本語教育と社会文化の関係です。

特に、日本の国内の日本語教育の中で日本事情という名称が1960年代に正式に使われはじめたんですけれども、日本事情がどういうふうに変わっているかという歴史的変遷、60年代から現在に至るまで簡単な概略を示したものがこの説明です。

日本事情というと日本の社会文化についての説明、状況とされていますけれども、これを外国人学習者向けに考えたものが日本事情と一般に言われていますけれども、60年代70年代というのは、その日本事情の内容というのは日本研究の成果としての日本事情でした。つまり、それぞれの日本研究としての専門、地域研究としての日本語研究、これは日本語研究も含みますけれども、その成果を教えるということが日本事情教育と位置づけられていました。つまりその教育内容というのは非常に専門的だったわけです。ですから、文学であるとか建築であるとか宗教であるとかそういったものなどが60年代70年代は中心でした。

それが80年代に入ると爆発的な日本語学習者の増加がありまして、もっと現代の日本、専門的な知識よりも教養的な知識というふうに広がっ

ていきます。それが80年代で、特にそこで注目を浴びるのが社会文化能力という考え方です。ここは日本人のものの考え方、日本人はどのように行動するのか、日本人はどういうふうにものを考えるのかというような傾向が、日本事情というふうに呼ばれるようになりました。むしろ日本語教育が、日本語学習が大衆化したということもあります。その場合には、教育内容つまり何を教えるかというよりも、むしろどのように教えるかということが注目されてきて、効率性、円滑性、到達性ということが盛んに言われるようになりました。

それが90年代に入りますと、はたして日本人のものの考え方とか、行動様式ということがそんなに簡単に言えるんだろうかという疑いというか疑問の立場が少しずつ登場してくるようになります。日本社会という枠組みを捉えてそこに参入したり、適応したりするという、日本の社会に暮らす人達がこのように思考する、このように行動するというあるパターンを考えるのではなくて、もっと現実の社会、現実の文化に即した問題発見解決能力ということを経営戦略としていく必要があるのではないか。そこではコミュニケーション能力と同時に問題発見解決能力ということが注目されていました。特にそれまでは教育内容と教育方法とが中心だったんですが、教育関係がこのあたりから日本語教育の中で注目されるようになります。教育関係というのは学習者と教師の関係でもあるし、また学習者間の関係、つまり教室におけるさまざまな人間関係、これを教育関係と言うんですね、これに注目する必要があるようになってきますということが指摘されるようになります。これについては「日本語教育は何をめざすか」に書きましたので、ご興味があればこれを見ていただければと思います。

ここまで多少アカデミックな話をしましたが、このような歴史的背景を踏まえて、今は何が考えられるかという話に移りたいと思います。

ひとつは、社会文化というふうにわれわれは言っていますが、いったい社会文化ってなんだろうって疑ってみる必要がある、考えてみる必要があると思います。

ここには個人から地球までの区切りというか境界のようなものを示しています。地球はひとつですけど、その中に60億の個人があるということになります。その1から60億の間の中でいろんな分割が行われていて、それがいわば社会の分割といわれているもので、そこに社会の境界があるわけですが、民族や地域という意味では3000から8000の民族や地域、これは言語も相当していますけれども、あるといわれています。それが大雑把に政治的に取りまとめられる形で国家という形で現在の世界に存在している。これが200前後ありますから、民族や地域の数に比べると、ある統合が行われているということがわかります。ところが、日本社会、韓国社会といったときに、その日本社会とはなんだろうか、韓国社会とはなんだろうかと考えると、かなり人さまざまにイメージを持っているものだと思います。

つまりここからここまでが韓国社会と非常に厳密に定義しにくいということは、ちょっと考えてみればわかるだろうと思います。それはなぜかという、一人一人が社会に対してさまざまなイメージを持っている、それらはそれぞれ異なっていると考えることが出来ます。ですから、イメージという部分が大変大きいということです。そうして考えてみると一人の人間はいろいろな社会のイメージを持っていて、そのイメージを背負いつつ生きていくとかがえることができます。ちょうど、このおじさんがソサイエティを背負って、それにあたかもつぶされそうになっていますね。

さらにそれに付随する文化の問題を考えようとすると、社会の内実として文化を考えていますが、文化を知ることとは、何であろうかと考えてみたいと思います。これは私の教室の留学生が質問するんですけども、たとえば平均的な日本人は、それにどのように答えるかという答えは

たくさんありますが、ここではあえてそのような質問をすること自体の問題性について考えてみたいと思います。

目上の人にもものをあげるとき、どう表現するかというのは、日本人はどのように思考し、行動するかと同じことですね。それを抽象的いうと、そのように思考するかということですが、そういう質問は何を求めているのかということです。そうすると、目上の人とは誰なのだ、ものをあげるというのは何をあげるのか、なんのためにあげえるのか、それはどういう目的でものをあげるのか、ものをあげることによって何を期待しているのかということが潜んでいるんですね。潜んでいるはずなんだけれども、そこまで考えていない。一般論として、普通の平均的な日本人はどのように思考し行動するのかというある答えを求めようとするところに問題性があると考えているわけです。その答えに文化があると思っているんです。

そのような平均的な日本人がどのように思考し、行動するかという質問は、一般論で個人の顔をもたない、のっぺらぼうな問いだと私には思われてならないんです。なぜかという、そこではテーマを自分の問題としてとらえていないということに気づきます。つまり、なぜその質問をするのかということを考えないままにある解答を求めようとする質問者の問題、それから解答の一般情報化、だから解答を得て、正しい答えを得ようとする、なぜ答えを得ようとするのかというその先はほとんど考えていないということになります。もし、一般的な解答を得られたとすると、日本人はこうなんだとステレオタイプ化してしまいます。そこで安心してしまおう。ああよかった、日本人はこうなんだ、とそれ以上考えない。そういう問題があります。

それは実は学習者だけじゃなくて、教師の側にも同時に起こっています。相互の思考や判断を停止させてしまうのですね。思考をストップしてしまおうと安心なんです、充足してしまい、それ以上考えようしないという大きな問題がある、と私は考えています。平均的な日本人はどのように

思考し、行動するかという問いに潜んでいる問題を少し整理すると、じゃ集団というのは、認識対象の主体となり得るのであるのか。つまり日本人はこのような思考し行動すると言うけれど、その日本人っていったい誰だろうかというところにまた戻るんです。

集団は認識の主体になり得ないのではないかというのが私の立場です。そう考えると個人を集団類型化することの問題が出てきます。そう考えると、文化というのは人間の一人一人のインターアクションのプロセスから生まれる個人が持っている認識と考えることができないだろうかということです。

それを私は「個の文化」という言い方で定義したいと考えています。

こういう考え方もあるんだと受け止めていただきたいと思います。一人一人の個人のインターアクションのプロセスから生まれるそれぞれの個人の認識、それが個の文化であると考え、いちばん必要なのは、国民、民族としての集団の括りではなく一人一人が持っている固有性つまりオリジナリティとっていいと思うんですが、それが重要で、そこに重要な意味があるんだという結論にだんだん近づいていくことになります。そこはわかりにくいと思いますので、いろいろご質問を受けながら、考えてみたいと思います。

そこで、社会や文化のイメージはどうやって何によって作られていくのかという問題ですが、ひとつは明らかに言われていることですが、情報です。情報というのはマスメディアとか地域、学校での教育効果であるとか、それから教科書もまさにその典型だと思います。他者の言説、先生がこう言ったとか、友達がこういったとか、経験のある人がこう言ったとかがさまざまな重層的に複合的に組み合わせあって、情報として受け取っています。どれがいいとか悪いとか選択を意識的かつ、無意識的にしていますけれども、それについての確固とした基準があるわけではない。毎日同じ話を聞いているといつの間にかそう思うってしまうこともあるでしょうし、

あるいは逆のこともあるでしょう。そのような情報の海の中でわたしたちはいつの間にか社会文化というものを作り上げている。

日本に留学した人としない人を区別しなくても、別に留学しなくても日本の情報をたくさん持っている人がいます。その人たちは日本に対するイメージを持って日本に学習にやってきます。日本に来た時、真っ白、透明というのはあり得ないですね。日本に来た時にすでに社会文化のイメージをしっかりとっています。それが一年、二年の留学で大きく変わる人もいますし、ほとんど変わらない人もいます。それはその人のさまざまな情報の受け取り方、考え方によります。

また、ある意味では情報のひとつなんですけど、情報に対して言われるのが体験です。体験は留学とか旅行とかのように母語話者と接触して、文化的体験を積んでいくということが盛んに行われますし、母語話者があまりその社会にいない場合には、ビジターセッションとして誰か連れてきてプログラムを組むということがあります。これは体験させることによって情報を確かなものにしていく、あるいは変容させていくということを考えるわけです。ところが、体験させればいいのかというとこれもちょっと大きな問題がありまして、体験するといってもすべての世界を体験することは到底できません。限られた時間の中で限られた人間しか会えないということがあるわけで、たとえば100人会えば日本人のことがわかるのか。10人あったらわからないか。それはなんともいえないですね。たった一人でも分かる場合もあるし、わからない場合もある。100人にインタビューしたところでわからないかもしれない。自分が体験したという思いが強ければ強いほどここから抜け出せなくなってしまう問題でもある。

ですから、情報と体験ということからいかに自分の思考とか認識とか判断とかを固定化させたり、画一化させたりせずになんか変容させていくか、そこから抜け出していくことが問題になります。逆に言いますと、情報とか体験によって自分の思考や認識とか判断が固定化してしまったり

画一化されてしまったりして、もう動かないものになっていくことは大変恐ろしいことです。これがステレオタイプにつながることになるといえます。

情報と体験をどのように乗り越えるかということがたぶん社会文化のイメージと関わっていくとき重要になります。これは単純に言えば、「なぜ」と疑うということしかない。つまり情報を疑い、体験を疑う。みんなニッチェようになってしまうんですが、ニヒリズムにならなずに非常に楽観的に疑うことしかないということになります。このようにロダンの考える人のように考えるわけですが、もうちょっと具体的に申しますと、「なぜ」と考えて、それをことばにして表現する、それから他者の反応をもらうというような、インターアクションといわれている活動が意味が出てくるだろう。そして、その結果、私達が知るのはいろいろな人がいていろいろな考えがあるという当たり前のことを体験する。その結果さらに、人は皆同じで一人一人違うというごく当たり前といえは当たり前なことを身を持って体験する。

ここで抽象化して考えてみると、一人一人が考えるというのは、自分にとってなにかと考えることは、固有性の問題につながります。確かに表現し、他の人にわかってもらってフィードバックをもらうというのは関係性がないと成り立たない。それを共有性といいます。情報と体験を乗り越えていくためには、固有性と共有性がどちらも必要だということになりますね。固有性だけだと独りよがりになってしまうし、共有性だけだと個人の顔が見えなくなってしまう。これを支えるのがインターアクションということになります。

これが今、大変大急ぎでお話申し上げた理論的な背景のごく一部です。一応今のような理論的背景を持ちながら、私が企画・設計した早稲田大学日本語研究教育センターでの授業の13週の編集したビデオをお見せします。これは2003年の3月に制作いたしまして、クラス名は総合3・8クラ

スと申します。週に1回昼休みをはさんだ2コマ続きの授業で13週おこなったものです。一般の授業と違うのは一応私が授業担当者ということになっていますが、私は最初にちょっと出てくるだけで、あとはあまり出てきません。主に活躍しているのが、TAと呼ばれる人とサポーターと呼ばれる人、それから実習生と呼ばれる人と3種類のいわば大学院生が中心になって動いています。TAというのはリーダーと呼ばれていますが、この総合のクラスを教育実習生としてすでに単位を取得した人です。それから実習生というのは新しく始めて総合というクラスに参加する教育実習生です。これは単位をとるために参加しています。もちろんこの授業の主役は受講者、学習者です。これは日本語センターの留学生別科の学生になりますが、世界各国から来た学生です。1年間のカリキュラムに参加しています。レベルは3・8になっていますが、3というのは初級後半です。1がゼロ初級ですので、1・2はここでは除外してしまして、3から参加することができます。選択の授業で3から8の人が誰でも参加することができます。そうはいっても、3・4グループとか7・8グループとかレベルによってグループを分けて活動を行っています。ただそれを行っていたのは2003年の3月までで、2004年4月からからはそのグループ別の活動は廃止しまして、自分の好きな人と好きなところでグループが組めるということになっています。これについてはすでに本が出ていまして、その内容については、出した本を見ていただくともう少し詳しい解説がございます。

14:30 - 15:00 ビデオ「考えるための日本語」視聴

細川：このビデオは簡単にいうと「レポートを書く」という授業です。そしてそのレポートのテーマは自分で決めます。一人一つ決めます。13週かけて、そのひとつのテーマについてすこしずつレポートを作っていきます。テーマを決めるだけでなく、選択の理由を書きます。これを動機と呼びます。それから、動機をめぐって、時間をかけてだ誰かとじっくりゆっ

くりと対話するというのがあります。これをディスカッションとよんでいます。ディスカッションの内容を自分のグループに帰って報告します。これを話し合いと呼んでいます。グループの話し合いを踏まえて、最終的に自分のテーマについての結論を述べるという活動があります。そして、最後に相互自己評価といって、自分のレポートも含んだ、お互いのレポートを評価し合う、その評価し合った結果がそのまま成績となって大学に提出されるという形になります。

したがって教師は評価に基本的に参加しない。学生たちだけで評価し合うというかたちになります。それをまとめたものを文集に作成するというかたちになっています。評価なのですが、相互自己評価のポイントとして3つ上げられています。テーマを自分の問題として捉えているか、インターアクションをどのように受け止めているか、動機から結論への流れの一貫性があるか。この3つだけが評価ポイントです。これ以上の評価はありません。これ以上でもなく、これ以下でもありません。それはなぜかということと固有性と共有性を問題にし、それを結ぶのがインターアクションという考え方がそこに組み込まれているからです。

今回のビデオの視聴の前に、ビデオを見て一人一人が考えていただきたいことが3つあります。まず、なぜこのようなクラス活動を行うのか、なぜレベルが混在させているかを考えていただきたい。次は、いわゆるカッコつきであるが、誤用訂正ということを一切おこなっていないが、それはなぜかという点である。言いか悪いかということではなく、なぜ誤用訂正をしないのかということを考えていただきたい。

最後に、言語教育における社会文化とは何なのか、ということです。このクラスではどういうふうにとらえているかということ、ビデオを見ながらぼんやり、しっかり考えていただき、最も重要なことは、ビデオ

を見て、お一人お一人が自分だったらどのような教室をめざすのか、めざしたいのかと議論するのが重要なのではないかと、私は思います。

15:15 – 16:15 討論（質疑応答を含む）

Q1：個人個人の違いに収束していく部分と個々の属する文化に収束する部分と2つの方向性があるように感じたんですけども、こちらでは個人の方に焦点をあてられているようなんですが、なんて言ったらいいかわからないんですけども、「日本」というふうにはっきり固定することはできないんですけども、なんとなく「地域」ですとか、その共同体から出てきた文化の影響というものを全部ひとつのものとして考えることができるのかな、と少し疑問に思ったんですけども、その点につきましてご意見をいただけますでしょうか。

細川：いかがでしょうか。集団の文化というものと個人の文化というものと分かれている傾向があるということですが。両方考えるべきだというご意見ですけど、その辺はいかがでしょうか。とふられてもそう簡単に答えられる問題ではないと思いますが。（皆：笑）

細川：今のご意見、ご質問に対して、もし私の立場ですと、この授業は日本語の授業なので、別に社会・文化について学びましょうと謳っているわけではありません。ただ授業の設計のコンセプトとして社会・文化のことは外せないだろうというのが、私の授業設計のコンセプトにあるということですね。その上で自由にテーマを設定してもらおうということですが、確かに、中にも出てきたと思いますけど、ドイツ人のものの考え方と日本人の考え方はちがう、とかっていうものは出てきます。ですけど、そこで結論を出すということがここで目的なんじゃなくて、それは一体どうしてそうなのかっていうことを議論すること自体、そのプロセスそのものが問題なんです。それを他者に対して、つまり他者というのは、グループのみんな、或いはクラスの全体のみんなに、どうやって説得的に

説明できるか、つまり、そして了解をとれるかっていうのが問題なのであって、別に、集団が個人かという2極対立でもないということなんです。ただ、私自身の考え方は、結局、じゃあ集団の文化とは何なんだということは徹底的に追求したい。しかし、それを追求していくと最終的に個人になるのではないかという意見はもっていますが、授業の中ではそれは様々に出てきます。両方あるだろうという人もいるし、人間は集団から抜けられないのだから、集団の産物だという人もいるし、それは様々、それは様々であって当然のことだと思いますが、ただ、どうしてそう考えるのかという理由ですね、考えの理由を問い正す、人によるとこれは日本語ではなくて、尋問の日本語だという、尋問というのは警察が犯罪者を尋問するのと同じような意味かもしれません、(皆:笑)というようになぜかという理由を徹底的に問い正していく、そして、それに対してどうやってきちんと答えていくか、というそのプロセスそのものが問われる、むしろそのこと自体がこの活動のテーマとっていいと思います。お答えになりましたでしょうか。

Q1: はい、ありがとうございます。

細川: 他にどうでしょうか。各グループでおもしろい意見が、興味深い意見が出ていると思いますので、どうぞ発言するように勧めてください。

Q2: 同徳女子大学修士課程の佐野と申します。私は学生時代に英語を習っていて、必ず学期の最後の評価で、「もっと話しましょう」というコメントをよくもらったのですが、母語でも口下手だったんですが、語学教育でしゃべる能力とか、口頭表現能力までつっこんでいいのか、またはそこまでしなくてはいけないのかということをお伺いしたい。

細川: はい、どうでしょうか。それについて何かご意見は。語学教育でおしゃべりまで干渉されたくないということですね。(皆:笑)

語学教育とは何かということが問題になりますね。語学教育でないもの

は何教育かということが問題となりますね。語学教育と何とか教育の境目は何かということになりますね。

Q3: これは、わたしのすごく限られた意見なんですけど、日本で留学生生活を何年かしたことがあるんですけど、私もしゃべることが好きじゃないんですよ。母語でもあまりしゃべらないですけど、でも、そこにいたときはしゃべりたかったんですね。なんとなく自分の意見とかすごく言いたいんですけど、言葉がないって言うというか、そういうのがあったんですけど。

細川: ほかにはないでしょうか。もしほかのグループでそのような議論がおこってあればちょっとそれについてのご意見をご紹介します。どうぞ。

Q4: 岡山の山陽学院大学の教員をしております。今のちょっとディスカッションの質問とかコメントとずれるかもしれないんですけども、その前の質問に関連させて、質問させていただきたいんですけども、この授業の目的というか主旨が、先ほどの細川先生のコメントで、ますますわからなくなったというのが本音なんですけれど。私は、最初にこれは、なぜ社会・文化との統合を考えるのかというふうに前提があって、それが一番最初に出てきたので、それと絡めてディスカッションされていると思ったんですけども、その「尋問日本語」というふうにも言われているということで、ディスカッションが手段ならそのやり方もいろいろあるというふうに思うんですが、文化・社会とディスカッションということ、或いは作文教育、アセスメントっていう学生相互の評価って言うのも、この授業の主旨というそういうことをもう少し詳しく教えていただければとてもありがたいのですが。例えばこのバックグラウンド、教育観点とか。ピアレスポンスとか、英語教育で、もうかなりやられていて、実践でプラスの評価なんかも、もう結構出ていると思うんですけど、

ディスカッションなら、ディスカッションも、もう日本語教育では、クラスでよくやられているというところがあると思うんですが。最初に理論を聞いたときは、社会・文化とディスカッションを考えるとところがおもしろいのかなと。それで個人なのか、いわゆる日本とかつていう集団と考えるのかというところがおもしろいのかなと考えたんですけど、その辺、ちょっと教えていただきたいと思うんですけど。ちょっと長くなって質問の主旨がわかりにくくなって・・・。

細川：前半の説明はお聞きになりました？一番最初から？（A4：はい）そうですね。

この教室活動の目的は、思考の表現化です。厳密に言うと、思考と表現の往還、行ったり来たりですね。この思考と表現の往還の活性化を目指すのがこの活動の目的です。簡単に言うと、それをやっていくと、もちろん、社会・文化とは何かということを、考えないわけにはいかないし、学習者たちもひとりひとりも言語学習における社会・文化とは何かという問題とつながっていくという文脈です。紋切り型に答えてもまた、悩ましいかもしれませんが、そういうことなんです。

Q4：思考の表現の往還の活性化というのは、今までの日本語教育ではできていなかったということで、今までのディスカッション的なものではないということですか。

細川：できていないというか、そこを明確に目指したものは、私の知る限りでは、ない、ということです。

Q4：では、これをするとな明確になるということですか？

細川：明確になるというか、設計としては明確です。設計として、明確に行うことが必要ではないか、という提案なんです。その結果、思考と表現の往還が活性化するか、しないか、というのは、その場を提供している訳ですから、活性化する人もいるし、いない人もいます。すべてが100%同じように活性化するわけではないですね。しかし、活性化するような

場として、この教室活動は、一応設計してあるということなんです。

Q4: 先生は、それを早稲田でされているのは、他のいろんな日本語教育の場でもできると考えてされているということですか。

細川: もちろん。それは、人によると思いますが。

Q4: つまり、小学校とか中学校とか、非常に、日本語が、まだこちら辺までになっていないレベルの人たちにも可能だということですか。

細川: はい。それは、可能だと思います。レベルの問題は、確かにありますし、時間もかかります。いわゆる言語経験が少ない人たちとやりとりをしてつくっていくわけですから。

参加者: 早稲田大学院の外国人研究員として、細川先生の講義に参加したことがあります。私も先ほど説明したとおりの考え方で参加した訳なんですけど。今まで文化ということは、定義として、200 か 300 くらいの数多い、そういう定義があるわけなんですよ。集団文化ということは、目でみえる、みえない、いろいろありますが、その中で、例えば、「誤解される日本人」とか「縮み思考の日本人」とかね、いろいろ、そういう集団文化論があるわけなんですけど、それは昔、本の著者がつくったわけで、今はそのとおりになっているか、と調査してみれば、そうではないと。100 人の中で 10 人いるか、5 人いるか、1 人もいないか、わからないということなんですけど、そういう集団文化論の中で、「個の文化」、個人が考える力が、言われるようになった訳です。要するに、このポイントはですね、「個の文化」、個人が考える力を育むための、そういう教育なんですよ。細川先生は、いろんな立場から説明すると思いますけど、わたしの感じたところでは、「個の文化」ですね。個人が考える力を育む、そういうことと、要するに自分の個の確立、参考的ですね、今、新入大学院生が、例えば広島大学で出した 101 冊の本がありますが、そのなかで、いろいろテーマがある訳なんですけど、一番出てくるのが個の確立なんで

すよ。要するに個の確立というのは、個人がしっかりした価値観をもって、世の中を渡るために、そういう考え方、価値観をしっかりとって、ことばの往還としての、相手側の立場にたって、自分を見るという、自己相対化ということばがありますが、自己相対化とは、自分自身ばかり考えるんじゃないくて、本質の自分以外に仮想の自分をつくって、仮想の自分が本質の自分を客観的に考えていく力構築するそういうもの、要するに思考相対化とかアイデンティティとか自分の価値観をはっきりする、そういう個の文化を育む、そういう目的で出たんじゃないかと思うんです。そういうことで、一応コメントなんですが、申し訳ございません。

細川：ありがとうございます。熱い声援をいただきまして感謝しております（笑）。そういう解釈もありますが、関連してでも結構ですし、そのほかのことでも結構ですが。

Q5：最初、こちらのグループから、どうしてここまで自分について問われてしまうのか、なぜという部分、動機という部分を問われてしまうのか、もちろん、それによって、自分が主張していくものがはっきりするし、やっぱり内容がないことばってでてこないものですから、空っぽのままで、「はい、どうぞ、ディスカッション始めましょう」と言っても、たぶん何もでてこなかったり、出てきても、多分話が続かないと思うんですね。だから、それをやるのはすごく意義のあることだと思うんですが、わたしが個人的に思うのは、自分でテーマを選んで、それについて動機を調べていくと、考えていくと、個人のプライバシーの問題まで、かなり踏み込んでしまう可能性がある。そこで話せないという状況もあるのではないか。それをクラスというある意味、教師によってつくられた空間で、なぜですか、どうしてですか、と問われていくことに関して、不安をもつ学生も当然いると思うんですね。そこで、そういったプライバシーの問題で、何かうまくいかなかったことがあったのか、ということをお聞きしたいな、と思ったんですが。

細川：それはいろんな人が、経験者がたくさんいますので。どうでしょう、その辺は。

参加者：今の質問にお答えしたいと思うんですけど、やはり、今のようなケースは往々にしてあります。それで、やはり言いたくないことを言わずというのは、あまりいいことではないと、僕は個人的には思っていて、やはり、そういうレベルで、テーマを設定する段階で、ある程度、ここでみんなで考えを共有したいこと、そういうふうな、みんなで話し合いたいことって言うのは、ある程度徹底していく必要があると考えています。答えになっていますか。

Q5：ありがとうございました。

Q6：遅れてきたので、全体的な主旨はちょっとわからないんですけども、プライバシーというところに、今、とても興味をもったので、そのことについて話したいんですが、今、クラスの中で、フリートーキングと呼んでいるんですけど、学生同士が話して、発表するというような形式をとっております。そのときに、問題は、一応、私の方で用意していくんですが、いくつかルールを決めているんですが、問題をつくりかえても、質問を作り変えてもいい。質問をたくさんつくってきてもいい。そのなかで自分にいやな質問、答えたくない質問があったら、答えなくてもいい、それから、どうしても自分に合わない質問ばかりだったら、嘘をついてください、と言うと、みんな笑うんですが、これは会話の能力を高めるためだから、嘘をついてもいいという、そういうルールをつくっています。嘘をつくというのが果たしていいのか、以前発表したときに、嘘までついてそんなことをさせるのか、と言われたこともあるんですが、教室の文化の中で、ここでは嘘をついてもいいんだというふうにして、一種のロールプレイに近くなると思うのですが、それで、プライバシーについては、その教室の中では解決というのか、あまり触れないで済ん

でいたというような経験があるのですが。

細川：ありがとうございます。ほかに関連していかがでしょうか。

先ほどから出ていますが、この活動やっていると自分のことを言いたくない、自分のプライバシーを出したくない、自分をさらけだしたくない、さらけだされたくないという意見はいつも出ます。ただ、よく考えると、ここの主旨は、プライバシーを話してください、という主旨じゃないんですよね。本来は、情報とか体験をどう考えるかという、そこを「なぜ」というふうに疑って考えていくという、要するに対象として、選んだ物事や、事象がありますね。ま、対象といいますか、対象や自分との関係を考えていくということであって、その関係を他者に提示してほしいということであって、決して自分のプライバシーをさらけだすという、さらけだしてほしいということとは本質的に僕はちがうと思っているんですよ。ただ、本質的にちがうけれども、そこは near miss をおかしやすい分野で、だから担当者は、確かにそこは気をつけないとならない。あくまでも対象と自分の関係を述べてください。あなたのプライバシーをさらけ出してほしいと言っている訳ではないということは、明確にしなくてはならないし、対象と自分との関係を述べるということは、さっき発言してくださった方相対化の話もありましたけど、対象とは何なのか、なぜ自分はその対象をそのようにとらえるのかと、自己相対化していく必要がある。そこのところが非常に微妙な関係なんですけど、そこがはっきりとらえられれば、別に仮に自分のことを話したとしても、それは他者にむけて自分が話すのだという認識のもとで、話しますから、その本人はプライバシーの侵害だというふうには考えない。それは、ご本人が混同している場合によく起こります。それは学習者だけでなく、実習をしている人にもその混同がしばしばおこります。つまり、こんなプライバシーを私は聞きたくない、だから質問もできない、と涙を流すひともありますので、時折。だから、そこはきちんと、そういう意味では、

理論的にきちんと抑えておく必要があります。

他にはいかがでしょうか。そろそろ李先生のコメントもいただきたいと思っています。

Q7: 私は韓国的高等学校で日本語を教えています。私は先生のこういういろんな研究は、場所が日本での日本語教育の中の傾向文化ってということだと思うんですけど、海外で教えている私のような教師たちにとって、問題点というか、いろいろ難しい点があると思うんですね。一番問題は、ふつう情報と体験によった固定化した日本文化というか、日本事情を教えているのではないかと思うんですけど、その考え方を、それを書いていくのがすごく大事なんですけど、今日、他者との文化、個としての文化ということ、今、現在、韓国の教師自体がまだそれを理解していないという問題点がまずあると思うんですね。それから、また、教室の活動で、日本語を1週間で2, 3時間ぐらいですけど、その中で、大体初級で終わってしまう現実のなかで、こういう考える力、生きていく力まで考えていくのは、とても先生にとっては負担がかかるし、大変なことではないかと思うんですけども。そういう海外での日本文化理解教育というのは、先生のお考えというか、研究はなさっているのかお聞きしたいです。

細川: いや、私は何も考えてないんですが。(皆: 笑)つまり、これは、世界中どこに行っても、どこでも、だれでもできる、と考えているというだけなんです。あまり不親切ですね、こういう言い方は。もっと親切に言うと、あっ、手があがりましたね。そちらの人に答えてもらいましょうか。はい、お願いします。

Q8: インチョン外国語高校で、日本語教師をしているんですけども、今、文化理解教育をどうするかというお話でしたけど、やはり日本でやる場

合と海外でやる場合とは違いがあると思うんですね。やはり、海外にいくと、全員が、例えば韓国であれば、韓国人で、自分たちが圧倒的なマジョリティな立場で授業に参加してしまう。そういう意味では、違うふうに考えているというのが、僕は、今、現場をもちながら考えていて、日本文化理解ということにとらわれなくて、異文化理解とは何かという、もっと根本的な部分から捉え直していく。例えば、高校でやるのであれば、学校とは何か、学びとは何か、そういったところから、文化とか社会について広げていくような、自分たちの根本を問い直すようなかたち、「なぜ」というのを大切にされたかたちで、異文化理解というのを考えていくと、もっと活動が広がっていくのではないかと考えています。それで、僕は、外国語高校なので、日本語で大体授業ができるんですけども、確かに一般高校の場合、週3時間で1年は大変だと思うんですけども、それは、韓国人の先生ということで、母語を、韓国語をもっと上手に使いながら、日本語と混ぜていくというかたちであれば、いろいろ先生によって個性のある活動ができるのではないかと考えております。

細川：ありがとうございます。もうひとかたぐらい。

Q9：すいません、新日本語学院という、まちの日本語学校で教えています。

私は、細川先生は、日本事情専門家でいらっしゃる和前々からお話を伺っておりまして、今日、ですから、混乱していますのは、先ほど拝見しましたビデオですね、先ほどあちらの方から話もあったんですけども、学生がこれを通してなにを学ぶのかと。我々教師をしていますからわかるんですが、作文力ものびるでしょうし、表現力ものびると思うんですね。ただ、細川先生イコール日本文化、日本事情とされているものですから、どうも先生のおっしゃる文化というのが、どうもちがうんだということを、今日は感じているんですけども。つまり、あそこに参加する学生さんたちは、わたしも歳とりましてわかるのは、今度、選挙ですごく熱いですよ、郵政民営化とか。やっぱり若い学生さんたち

は、どうなのでしょう、私の考えでは、文化のレベルとしては、たぶんそんなに高くないと思うんですよ。どうもその文化が違うんで、うまくかみ合わないのかなと思うんですけど。それが一番の疑問点です。それと、我々、出版もやっているんですが、韓国で今、韓国語教育が非常に熱いんですよ。それで、言葉だけではなしに、韓国のいろいろな文化をね、インドネシア、ベトナム、タイ、中国、フィリピン、あちらの制度が変わりまして、日本での韓国語教育が盛んになると思うんですが、教師が一体、韓国語のなにを、どう教えるか、それプラス、韓国の文化ですね、なにを、どう教えるのか、全く整備されてない状況で、非常に興味が高いんですよ。日本文化、日本語ですといろいろありますよね。項目がありますよね。日本文化の、コンビニから始まって、天皇制に至るまで、いろいろあってね。そういうのがあると非常に助かるわけですよ。そういう話をお聞きしたくて参ったんですけど、どうもちがうみたいだということが、はっきりわかりまして。ただ、若い人たちが話す話題、若い人たちも、このクラス活動を通して、なにを学ぶのか。学ぶものもあっていいんじゃないかなということを感じました。以上です。

細川：どうもありがとうございました。要するに、今、ご質問いただいたことが、1960年代からずっと日本語教育のなかで問題になってきたことで、いまだ解決をみないことなんですよ。つまり文化要素を取り出してそれを教えることが必要だ、じゃ、文化要素って何なんだ、コンビニから天皇制までいろんな人がピックアップしてきた訳ですよ。ところがそれがいくつあればいいのか、だれにもわかりません。それはどんどん、どんどん増えていく訳ですよ。しかも、人によって、ちがっていくわけですよ、じゃ、100人の人があげた共通項目が、基礎的な項目なのかというと、決してそんなことは言えない。そうすると結局、それは、そういう要素をあげるという発想自体を解体させざるをえない、というふうに

私は考えているんですよ。だから「崩壊する日本事情」という論文を書いたことがあるんですけども、結局そういう意味での、要素を取り出して教授する発想そのものが崩壊せざるをえないんじゃないかと。

じゃ、なにができるか。そうするとひとりひとりの持っているいろいろな文化イメージ、社会イメージをぶつけ合って、そこで様々なことを学んでいく。しかし、それは単に情報や知識のやりとりじゃなくて、本来考えていること自体の思考のやりとりでなければ意味がないだろうということになります。もちろんそうするとそのなかで、日本文化って何だろうとか、天皇制や郵便局の民営化問題も少なからず出てくると思いますが、そういうテーマが出てきたならば、そういうテーマで議論するということは、十分ありうる。そのなかで、自分の必要な情報を取っていくということ。それは決して一方的にこれが大事だから覚えなさいってかたちで覚えるものではなく、そこで自分が興味関心をもったからこそ、そのテーマを学ぶということは、こういう活動で十分できるのではないかなと思っているんですね。漫画とは何かという議論を今までかなりやりましたし、それから、もちろん、戦争問題なんかも常にあがります。もちろんそういったかなり社会的な問題を扱う学生もいるし、もっと個人的な自分の留学の生活とか、そういうところで、収束させていく学生もいますし、比較文化論的な立場でレポートを書く学生もいます。それはもう様々。そのやりとりの中でしか、私は文化習得というか、文化獲得というのはできないのではないかというふうに、最近思い始めていることです。ただ、もちろんその考え方自体にはいろんな意見もあるでしょうし、これから議論をしていかなければいけませんし、これは比較的最近の「言語」という雑誌に書いたんですけども、文化って何なんだろうと今、ご質問にいただいたそれ自体の議論が、日本語教育では、非常に少ないですね。それを真正面から議論しようとする雰囲気はまだあまり高まっていないので、なんとかそれを議論をする場を作りたいと、

私自身もその中に入って議論したいとふうに考えているんですが。よろしいでしょうか。それでは、そろそろ時間も迫ってまいりましたので、李徳奉先生にコメントをいただきたいと思います。お願いします。

李先生のコメント

こんにちは。早稲田の日本語教育センターの日本語教育のビデオを見せていただいたのは今日が初めてなんですが、そういう立場上、コメントというと大袈裟だけど、思っていた以上、先生が考えていることと、私の考えていることと共通点が多いことに驚いています。もちろん意見の違うところもありますけれども、今日見せていただいたビデオから考えますと、どっちかというところ、自分の考えを日本語で表現する、自分なりの表現を身につけるといふところに重点が置かれていると、私は理解しました。

たぶん皆さんの中で、文化を取り入れた日本語教育をどういう風に運んでいくべきなのか、そういうところに関心をお持ちの方も、たぶん今日のビデオから学ぶことも多いんじゃないかと、そういう機能も達成できるんじゃないかと、私はそういうふうに解釈しております。

ちょうど私は、同徳女子大学の初期の話なんですが、1986年、うちの6期生が2年生のときのことで、なぜか3、4年生になっても、日本語の会話力がぱっとしない。これはおかしい。私は個人的に韓国人なら、1年勉強して、当然ある程度の会話をしゃべらなければならない、そういう風に今まで信じているほうなんですが、そこでいわゆる戦宣布告みたいな感じで、他の先生たちに、面とむかって、会話の時間を私によこしてほしい。半年で全員しゃべらせて見せる。ちょうど「ホトトギス鳴かしてみせる」という感じで、2年生を半年教えたんです。40名でしたけど、全員その半年で自由にしゃべるようになりました。

どういう方法でしたかと言いますと、まさに、総合学習だったんです

が、動機付けとしては、成績という、すごい（笑い）方法。まず、2人ずつペアを組んで、しゃべりたいことをなんでもいいから私の前で10分以上しゃべれと、日本語で。それだけです。私は何もやっていません。週2時間の授業でして、1週間の間2人でどのような手段をつかっているのか、それはわからないけど、とにかく全員2人。ただそのときは、指摘も修正もしませんでした。1ヶ月、2ヶ月くらい、自由にしておいて、そのあとわたしのほうからテーマをだしたんです。半年後、最後のテストのときは、その場でわたしが出したテーマについて2人でしゃべる。ただそのときはディスカッションではなかったんです。なぜかといいますと、ディスカッションというのは、また、これはステレオタイプの考え方なんです、確かにディスカッションの力をつけて、将来日本でどれほど受け入れられるか、そういう心配がありまして、打ち合わせ、2人の話し合いで取り組むという方法をとったわけなんです、そのとき私が考えていたのは、確かに4技能は、分けてない、それから、動機付けを成績ということで脅迫を用いている。いわば、脅迫と総合学習の効果だと思うんです。

ただ私が思うのは、40人という人数は多いといえば、多いほうなんです、なぜそこまで成功したのか、やっぱり私は総合学習を進めたまでなんですけど、まわりの先生は、文法を教えたり、作文の先生は作文を教えたり、そういう教え方もまわりにありましたから、それを私は総合化することが、むしろ効果があったと、私はそういうふうに解釈しております。ただその半年の経験というのは、かなり手ごたえがありましたので、海外でもそういう総合学習というのは、可能性が非常に高いと思います。

それから、学習者を信じるのが大事だと思います。私は、大きな口を叩いたほど自信があったわけではなかったんですが、しかし思った以上、学生たちが、うまくできたのでびっくりしたのも事実です。そのあ

と、学習形態として、93年、韓国版「月刊日本語」に紹介したオープンメソッドというのも、今日、細川先生が紹介なさったいわゆる自律学習、問題解決学習と同じようなプロセスの教授法を紹介したことがあります。2000年の日本版「月刊日本語」3月号にかなり詳しく紹介されていますが、それは、教えない日本語教育なんです。いわゆる学習者主導型日本語学習ということで、そこでの紹介は一応、会話、日本語学習だけに限っての例でしたけれど、まず学生が問題点を見つける、それから自分たちがチームを組んで、自分たちなりの解決方法を立てていく、そこで解決したことを発表して、発表したものを、ほかのチームと一緒にディスカッションもいいですし、批評、または意見をきく。そのあとまた修正していく。そういうふうな、完全に自律型学習方法として紹介したオープンメソッドとかなり一致しているところが多いんですが、今日、早稲田の例だと、やっぱりディスカッションというところに潜んでいるひとつのねらいは、いろんな考え方を他の人の意見と比べながら調整していくうちに、ステレオタイプから逃れていく、それを壊していくところに、狙いがあるように思うんですね。

ただし、そういう壊し方で、果たしてステレオタイプは崩れるものなのか、そういう疑問ももちろんあります。私は個人的に認知言語学をやっている立場から言わせていただきますと、人間というのはステレオタイプで考えている、認知言語学では、それをプロトタイプと言っているんですが、結局、私たちが覚えているのはすべてがステレオタイプのなんですね。そういうしくみになっているので、ステレオタイプは捨てたものじゃない。

むしろ私は、別の日本文化の理解という授業で、今23年間ずっととっている方法は、そういうステレオタイプへの挑戦なんです。どうやってステレオタイプの属性を把握して、いわゆる文化リテラシーとして、どういう風に自分たちの文化・異文化を考えていく力を身につけるのか。そ

ういう力を育てるのにいろんな試行錯誤を繰り返してきました。そういうステレオタイプというのは、なぜ変なステレオタイプをもつようになるのか、やっぱり日本というある対象に対するステレオタイプというのはマスコミの影響が大きいですね。まわりのいろんな意見もステレオタイプに繋がるんですが、その認識を私は、現実だと思うんです。もちろんそれには誤解も多いです。しかし、それは、あるステレオタイプが成り立つということ自体は、現実ですので、その現実から逃れてはいけない。ただ、その現実の裏側、その背景に何があるのか、そこを理解して、その真実と真実でないことを見分けていく、そういう学習をしているうちに、文化に対するある個の文化にまで見えるようになっていく。だから、あるステレオタイプを持っている学生に日本の友達ができたなら、日本へのイメージは完全に変わっちゃうんですね。なぜかといいますとその個のイメージがまたできあがるからだと思います。だからそのようなステレオタイプは全然心配いらないと思うのです。

取り合えず、学校教育で取り組んでいくべき文化の授業というものは、言語教育でそれをマッチングさせるのは非常にむずかしいと思うんですが、2002年の世界大会、韓国、ソウルで行われたときのタイトルを「総合的日本語教育」というふうにしたのは、今回の総合学習とちよっとずれた題名なんですが、いろんな領域に対するいろんな情報、それを与えて、それらを日本語教育取り入れていく、そういう考え方としての「総合」だったのです。

そこで今のうちの学生たちは、日本の文化というのは量的に多いし、10年教えても日本の文化をすべて、教育することはできないと思うんです。うちの学科では、日本文化の理解というのは、生活文化の理解と、精神文化の理解というタイトルで1年間6単位の授業しかないんですが、その授業で私がとっているやり方のポイントは、テーマを学生が決めることです。班を作って、3, 4人ずつチームを作って、自分たちなりにそれを

とことん調べてみて、またいろいろ考えてみる、また韓国とどうちがうのか違いをみつけて、その原因は何なのか、それを自由に考える。それを半年間、1つのテーマについて考えていきます。それをみんなの前で発表してその考え方についていろいろディスカッションをしていく。それをやっただけで、学生たちはやっぱり文化ということに対して、いろいろ自分なりに、理解していく。そういう方法を私の個人的な経験として、一応手ごたえのある結果として認めています。トピックの数は少ないんですが、あるトピックに対して、アプローチする姿勢が変わっていくということは、一生どういう場面に出くわすかわからないんで、そういう力をもっていれば、将来どのような文化的場面に出会っても、自分なりに、また解決して、解釈していくことができるだろうと、それを私は文化リテラシーとして、今の学校の授業で教えています。

だからそういう文化というのは、確かに今の言語教育において、最終的に、最後のゴールとして考えてみてもいいほど、本当に大事なテーマだと思っていますし、強いて言えば、日本語を一切しゃべれなくても、文化リテラシーに対する理解さえ育ってておけば、相当のコミュニケーションがとれると考えているほどです。

確かに大事なことで、これをどうマッチングさせるかが課題で、多分細川先生もそういうところに焦点をあわせて、いろいろ研究をなさっている過程だと、私はそういう風に勝手に理解しているのですが、私もそういう立場にいる者のひとりとして、今の個の文化というものに対する考え方というのは、最終的にそこがゴールで、そこが目的であってほしいんですが、やっぱりはじめからそうなりうるというのは期待できないんで、先ほどディスカッションによって生じたことで、しゃべっているうちに何もわからなくなるという状態ですね。結局わからなくなるということが、そこからまた始めればいいですけども、その続きをどうやって学習プログラムとして学生に教えていくべきかというのも、これ

からの課題だと思います。自分の経験に照らして勝手に解釈した話ですが、とりあえずここまで。

16:30 – 17:00 ライブ対談 (李徳奉＋細川英雄)

細川：時間もだいぶ押してきましたけど、折角の機会ですので、私のほうからちょっと李先生に質問させていただきたいのですが。共感をいただいたと解釈していいんだと思います。どうもありがとうございます。ただ、これは、私は日本国内で日本語教育を主としてやっていますが、日本国内でも、このような活動そのものに対する理解というのは、それほど十分に得られるわけではありません。そういう意味では、かなり私は四面楚歌、徒手空拳、孤立無援、というふうに自分では自覚していますが、その辺のあたりの感触は、韓国で日本語教育をやっていらして、いかがなんでしょうか。

李：90年代半ばあたりの話なんですけど、ある日本の、日本語教育専門家の話なんですけど、固有名詞はあえて言いませんが、内容中心の日本語教育のことを紹介なさった方がいらっしゃいます。しかし、なぜか本物の内容中心の説明じゃなくて、ちょっとぼかしているところが多かったんです。なぜ、その辺でぼかしているのかと聞いたら、「いや、日本の事情があるんで、それを前端的に押し出しては、ちょっと自分が困る」という意見だったんですけど、まさに今の細川先生は、四面楚歌という感じが、私は、日本全体の日本語教育の雰囲気からすると当然理解できます。ただ韓国の場合は、韓国の現場もピンからキリまでまちまちなんですけど、ただ学習指導要領からするとこういう授業を積極的に勤めているんですね。だから現場の先生のなかには、こういう授業がかなり消化できて、積極的に導入している方もかなりいらっしゃいます。先月の釜山での日本語教師研究会のときの発表にもありましたが、まさにこういう学習者中心の授業をやっている先生の報告もありました。しかし、それはまだマ

ジョリティではなく、まだマイナーなほうなんです。しかし、年々こういう変化は目に見える変化がありますので、私はむしろ韓国の日本語教育の現場においては、こういうやり方も難しくはない。ただし、現実というのは、非常に妨げになっている訳でして。そういう授業をなさっている先生は、主に、入試をあまり気にしていない。実業系学校の先生が多い。入試に力を入れている高校の場合、もしそういう授業を取り入れている先生がいたら、多分袋叩きにされる。だから、理想としてはそう考えていても、実際にはできない先生もかなりいらっしゃるんで、それをどの線まで調整していくかというのがむずかしい。だから日本とはまた別のそういう風にできないという現実も確かにあります。

細川：韓国の場合、高校レベルの日本語教育がかなり普及していると思いますけれども、日本語教育界として、教育研究界という観点から見ると、どうでしょうか。

李：やはり日本語教育と言っても、専門教育いわゆる日本語科ですね。その場合の内容というのは、日本で行っている日本語教育とはちょっとちがうところがありまして、はじめは国語国文みたいな感じで、いろんな科目がそろっている、そういう状況でしたけれども、結果的に考えると、すべてが日本語教育につながっている。例えば日本の歴史を教える、できるだけ覚えさせるのではなく、一種の討論のかたちで、また調査発表のようなかたちで、思考能力が身につく。また、文学のことも作品について分析し、自分なりの考えをまとめてみる。そういうのがそれぞれ全部日本語教育の様々な能力につながっていく。かなり理想的なところもあるんですね。討論や調査発表が一般化していますので、それを全部まとめますとひとつの総合学習につながっている。だから、最初、スタートはあまり理想的じゃないスタートだったんですけど、結果的には、利用の仕方によっては、いい方向に、最近変わっている、そういう状況です。

細川：ありがとうございます。一応予定の時間にそろそろなりました。しか

し、折角の機会ですので、全体で何か、今日のワークショップを踏まえて、どうしても発言なさりたいという方、最後にここはおさえておきたいという方いらっしゃいますか。

Q10：サナン大学に今年から勤めております相沢と申します。李徳奉先生にお聞きしたいことがありまして、私、以前高校で教えていたことがありますが、李先生は、高校の教科書に携わったことがおありなので、お聞きしたいのですが、文化の面で言いますと、高校、特に外国語高校にいたものですから、高校での日本語教育に関心があるんですけども、外国語高校の文化の教科書なんですけれども、いわゆるステレオタイプ化、羅列型の教科書、6次教科書に比べると、7次はちょっとよくなったかな、と思うんですけども、まだそういう傾向があるし、一般の日本語の教科書を見ても、コラムなどをみるとですね、やっぱり相撲とか、祭りとか、そういうかたちで出てくる場合が多いですね。李先生のお考えのなかでは、今後の教科書のなかにおける日本文化の扱いについて、もし考えてらっしゃることがあったら、是非お聞きしたいと思いました。

李：確かに日本文化を教えるということは、1985年に韓国の国策として決まっています。その国策というのは、当時私はだいぶ若かったんですが、その国策会議に参加して、異文化理解教育の重要性を主張してから、すべての教科書に各文化論が入るようになります。確か、86年あたりだったと思いますが、第6次の、学習指導要領にすべての外国語科目に文化という科目がはいるようになったんです。教科書ができたのは96年に初めてなんです、確かにトピック中心の内容になっています。あえて、なぜトピック中心にしたのか、それは、高校という事情を考えてまして、やっぱり高校生は何にもわからない、日本に対する情報が全くない、ということは、やはり、情報をもとにして何かを発信しなければならない。

それからまた、日本文化を理解するということが目的じゃなくて、日本についていろいろと知るということが目的だったんですね、そのときの文化論の授業というのは。ただし、マニュアルなのに教科書だけが出てしまったんで、困っているわけなんですけど、実は、かなり分厚いマニュアルが計画されていたんですけど、そのマニュアル完成間際に、全部取り消されてしまったんですね。そこでトピックだけが残るようになってしましまして、かなり質の悪い本になってしまったわけですが、第7次の場合は、少しレベルを低くして、ただ第7次の場合も、まず中心はトピックです。ただ、いろいろ考えてみることを、教室活動として取り入れているんです。だから、そのトピックを覚えるという必要は全くなく、それについていろいろ考えてみて、自分なりに関心をもつ、インターネットに入ることをすべてすすめていることから分かるように、今の中学、高校の日本文化学習の目的は、日本に対して、関心を持つということなんです。だから、理解しようとする態度を育てる。理解するんじゃないんですね。理解しようとする態度を育てる。そういう方向へ関心を持たせるところに目的がありますから、その目的に合わせていろいろ情報をあたえる、そういうとこに重点が置かれています。だから、それは学校ごとに、教育目標が変わっていくのは当たり前で、ただ、異文化理解に対しては、先ほどインチョン外国語高校の先生もおっしゃったんですけども、異文化に対する文化リテラシーはすべての教育において、そういうことは育てられないといけないわけです。それを日本語を通じて、異文化を理解する力を身につける、そりゃあ、相当難しいことだと思うんですね。だからすべての教育が、これから取り組んでいくべきだと思います。ただ、日本の文化を理解して、何をするのか、それも本当は、変な話なんです。何のために日本の文化を理解しなければならないのか、例えばですよ、日本に外国人労働者として行くのだったら、確かに日本の文化を理解しなければいけないだろう。しかし、もし東アジアが

うまくいって、経済ブロック化した場合、アジアの公用語として、日本語、中国語、韓国語、ロシア語が公用語になったと。そのときの日本文化の理解というのは、またちがうと思うんですね。それから、ただ会社でビジネス上のやりとりをするだけだったら、もちろん今まで通り、文化というのはいらないと思います。だから、何のための日本語教育かによって、教育の中身、または教え方も変わってくると思います。一概には言えないところがありますので、その多様化こそ、私たちがこれから取り組んでいくべき側面ではないでしょうか。

細川：もう時間が過ぎましたが、もしお一人、大きなテーマで何かあれば。はい。

Q11：先ほど、細川先生に質問をしましたが、実は、私は、韓国での、日本文化理解教育、異文化理解教育を高校でどういう風に受け入れていくのかということに関心をもって、細川先生の本も何冊か読ませていただきましたし、あこがれて来ておりました。それで、今日すごくいい話を聞かせていただいてうれしいですけれども、先ほどの考える日本語教育、ビデオなんですけれども、自分としての結論は、結局、それぞれ自分だけが持っている「個の文化」を相手に理解してもらう、相手の考え、お互いの考え方を認め合って、それをそのまま受け入れていく、理解し合っていくということが大事なので、誤用訂正をわざとしていないのではないかと思いました。それから、韓国での、異文化理解教育、日本文化理解教育、第7次教育と言われていますけれども、自分が考えるのに、韓国で何のために、何を目指して、日本文化教育、異文化理解教育をしていかなければならないかについては、まずは、異文化対応能力の育成ではないかと思うんですね。日本文化に接触したときに、初めて接触した場面に、ショック、衝撃を受けたり、或いは葛藤を感じたり、或いは自分のもってきた固定観念に対して、観念で混乱したりするときがある

と思うんですが、そのときにどういうふうに対応していくかということ
を、その能力を、育成させなければならぬと思うんですよね。もう一
つは自文化を客観的に理解して、見直す能力も、この異文化理解能力に
入れなければならぬのではないかと思うのですけれども、まず自分の
文化を客観的にはっきりしておかなければ、相手の文化を理解できない
ということが、まず、高校生、というか、韓国の学習者たちに理解、育
成させることだと思います。それから、最後は豊かな人間性の寛容って
いう、大幅に言いましたけれども、国境を超えて、ますます交流が増え
ていくなかで、自分の文化と違う人に会ったときに、その人に対して、
どのような寛容な態度をとるかということ、また育成していかなけれ
ばならないのではないかと思います。李徳奉先生は、日本の異文化理解
教育に先頭に立っていろいろなさっておりますが、これからは、日本だ
けではなくて、韓国でどのようにしていくのかということを経験をいろいろ考
えていきたいと思っています。

細川：長い時間いろいろありがとうございました。そろそろ時間も参りました
ので、今日のまとめを簡単にしたいと思います。今日のワークショップ
は、なぜ社会・文化の統合かを考えるのかということでお話ししました
が、社会・文化に対する考え方そのものに、いろんな立場があることがお
わかりいただけたと思います。これは、これからゆっくり議論していかな
ければいけないのですけれども、同時に、今、李先生のお話にもあつ
たとおり、非常に多様化しているときに、一番重要なことは、それぞれの
日本語教師が自分の教室っていうのは何なのか、私の教室は何を目指
しているのか、という問いではないかと思っています。それについては、
この7月に出了た日本語教育学会の「日本語教育」126号に『実践研
究とは何か－「私はどういう教室を目指すのか」という問い』という論文
を載せました。そこに、教室を目指すことの意味について書きましたの
で、またご意見等をいただければありがたいと思います。本日は、いろ

いろいろ意見をありがとうございました。それから、グループ・ディスカッション等でも、たくさんのご意見をいただきました。ライブ対談という、ちょっと気取って、大げさな題をつけたんですが、李先生には、本当にざっくばらんに、ずばりと話していただいて、とても有益でした。長時間にわたり、お忙しいところありがとうございました。李徳奉先生、本当にありがとうございました。(拍手) これで韓国のソウルのワークショップを終わりたいと思います。

5 アンケート

今回のワークショップでは、参加者に記名でも無記名でも結構でワークショップのご要望、今後のご要望、もしくは質問そして、ビデオを見た感想など、ワークショップの内容に関するアンケート調査を行った。アンケートは資料と共に配った白い紙に、考えたこと、話したいことを自由に書いてもらった。そのまとめは以下のとおりである。

釜山 8月31日

■なかなか形式(文法・文型)という呪縛から抜けられない自分があることに気がついた。

これまでおしえるべき文法・文型をどうやって文脈を結びつけるかということに四苦八苦してきたが、文脈を先に持ってくるという単純なことをどうして思いつかなかったのかとも思った。このような総合的な活動を通じて学習者がどうやって言語を自分の中に取り込んでいくかとても興味がある。

■その他の疑問として学習者の母語がひとつの場合でも効果的かどうか。

一人一人が「個」という文化を背負っているという意味では母語がいっ

しよでも異なっているとしてもそれは問題ではないと思うが学習者の文化背景が多様な方が多様な価値観が共有できていいのではないかな。

光州 9月1日

- 言語だけの教育じゃなく考える日本語というテーマが本当におもしろかったです。でも学生からのいろいろな反応がしりたいです。
 - 日本語を勉強している人たちは（もちろん留学をしない人）自分で日本語を勉強するには、上手ですけど、その実力をつかうのは大変です。わたしも同じですけど、人の前で話す（自分の意見を話すとも）外国語教育に必要だと思います。この方法は外国語を習う学生にあう教育だと思います。
 - このビデオをみて一番いいと思ったのはいろいろな国々の人が日本語だけで自分の意見をはなしたり、相手の意見を聞いたりすることによって、お互い自分の国の文化も知らせる機会になれるし、また相手の文化も理解することができて、けっこう良いと思った。そして自分の意見を一方的に話すのではなく、自分と違った考えをもった意見をきけるので、いいと思う。わたしもこういう授業をぜひ体験したいと思った。
 - ビデオをみて感じたことはたくさんありますが、ひとことでいえば外国人にはすごく役にたつすばらしいやりかたの授業だと思います。大体同じレベルの人たちが集まって各自の意見を交換しながら、日本語の実力はだんだん高くなると思います。機会があったらわたしもこんな授業にぜひ参加してみたいなあとおもいます。
 - オリエンテーションは韓国と同じですけど、韓国はあまりグループを作ってお互いに意見を話す機会あまりないです。けれども、韓国はあったらレポートをするために3～4人が一緒にする場合あまりないけどレポートだけ、このような機会はないです。
- 大体、せんせいが話すことを中心にして自分の意見を話す。集まって聞いて、話す機会があまりないです。でもこのビデオの中では自分のテー

マから色々な発表するし、他の人達がわからない部分について話しますからもっと理解しやすいし、勉強も自然にできますからよかったです。作成での授業は先生の一方的な授業じゃなくて意見とか自分が準備したことを発表しますから、学生たちが自分の話をもっと自分に役に立つと思います。作成して自分が準備することをほかの学生たちに話して、自分のレポートの中で不足部分があったら他の人が不足部分を話しますから、一人で作るよりもっといいかなあ。退屈な授業になるかもしれません。

■わたしは自分の興味があるところについてしらべてほかの人にせつめいしてあげるのが印象的でした。今のわたしは習うほうだからちょっと自分の意見はいいにくいから・・・。

■このビデオで見るといろいろな国の人があつまって勉強しているすがたがみえますけれど、それがいいと思います。外国人としたくなることもできるからいいと思います。そしてレベルが違う人が集まって勉強している姿もいんしょうてきでした。

自分が思っているのをどういうふうに表示すればいいのか教えてもらうところがほかの日本語授業よりいいでした。

■(長所) 評価全員 A できる。言語能力上がる。

(短所) 歴史・日本事情・文化などの授業はそんなできないと思う。

■授業の進め方について考えると論文やレポートと同じ用に、「なぜ」をいうものに基づいて進められていることに気がついた。まず動機があり、考察をし、結果をうみだす。この動作が日本語会話にもいい効果にもなっているのではないのでしょうか。

■授業のすすめかたについてはお互いに自分の考えを交換するのが一番いいと思います。

■今までの授業とは違う授業で、一度うけてみたいけれど、個人的な自分のスタイルがあるから自分にあう授業なら何の授業でも楽に勉強ができる

と思います。

■いろいろな国の人たちが集まって自分の意見についてほかの人たちと話し合いながら自分が思ってたことがなかったことや人がいってくれてわかったことがあって、自分の重い尾w どんどんだすことができてよかったと思います。それにひとつのテーマで3ヶ月tるづけていくのが余裕があってゆっくりかんがえてみる時間ができたと思います。あと日本語で話すから単語表現をふやすことがあるから特に自分の実力の向上に役に立ったとおもいます。

■そのようなやり方はグループの学生がすくなければこうかが高いとおもいます。自分のいけんを発表するために自ら勉強する方法がいいとおもいます。そのようなやりかたはかんこくには学校のじゅぎょうより塾の授業のほうがいいとおもいます。

■あまり韓国にない授業の方法だからびっくりしました。いろいろな国籍の人々と意見を話しあうことがいい点だと思います。自分の考えをほかの人に意見する機会があるから、日本語も上手になりましょうね。わたしも一度くらいは参加したいと思います。

■そのようなやりかたはいいと思いますけど、じっさい高校でそんな方法でできるかどうかこれからもっとかんがえなきゃと思います。

高校のじゅぎょうの時間もみじかいし、学生の数も多いし、また学生たちがこのような方法になれていませんから、いまの韓国の高校では、ちょっとむりじゃないかと思っていました。でもこれからもっとたくさん研究してかんこくに合う方法をみつけれればいいと思います。

■ビデオをみて感じたことは自分の意見を、自身をもって発表するのがよかったです。お互いに国が違う人々が意見を交換するのもよかったです。私は大勢の人々の前で発表するのが下手ですので、ビデオの中に人がちょっとうらやましかったです。機会があったらビデオのように授業に参加したいです。

■このビデオを見てからの感想は自分が関心をもっている部分について発表したり自分が思っている意見などいろんな国々の前で発表した様子をみました。私は討論に苦手なんですけれども、そんな講座があれば、参加したいです。

将来は日本語の先生になることです。先のビデオに参加して将来先生になったときには学生と先生が一員になって学生の意見をよく聞いたり、アドバイスしてあげたいです。これからセミナー・討論にも関心をもって自分の意見をみんなに伝えたいです。

■内容はよかったです。雰囲気もいいし、勉強のおしえるほうもきにいました。でも韓国教育実情には、あわないとおもいました。

韓国で日本語は外国語です。文法とか単語のおしえる面はビデオのなかではみえませんでした。その部分はちょっとごんねんでした、でも私も機会があったら、早稲田大学日本語センターで勉強したいと思いました。

■あるテーマについて自分が何をやりたいのかをはっきり立てることができるといふ点でいいとおもいます。またみんなに自分があるテーマを紹介する動機をはっきり言った後、みんなの意見をきいて、その意見をまとめて、ひとつのレポートが完成できるというのが自分にやくにたつと思います。ところが、今の韓国の教室活動ではこのやりとりがていちゃくするにはたくさんの時間がかかると思います。

■「考えるための日本語」教育上いい点もあるし、悪い点もあるおもいます。

- (1) 自分の考えをほかの人につたえること。
- (2) 主題も人にとってべつべつなので面白い。
- (3) 動機→ディスカッション→結論までは時間がかかる。でも最初は、固有でも最後は共有制ができること、興味・知識・仲良くなる、その3つが世界中のひとつの教育だと思う。

■新しい勉強の方を教えてもらって新鮮なショックでした。私もし先生になるなら、ぜひためしてみたいです、この方法を日本語だけではなくし

で、文化とかいろんな分野で使ってもよろしいとおもいます。

- 2002年日本に留学するときにおもいだしました。日本語学校にかよったんだけど、じゅぎょうが自分の意見を話すことだったんです。日本語の勉強をこえてないか考えて、自分の意見をまとめる勉強だと思います。みんなに自分だけの意見を言うのがもっと自分のことをこうじょうすることができると思います。たのしかったんです。

- 自分の考えを自由に発表するのができるからいいプログラムだとおもいます。外国人の場合は日本語でしゃべるのが難しいですから、一緒に集まって同じレベルの人々に話したらもっともっと上手になりますと思います。

通常考えないことについて、もっと深く考えるのができますから、いい機会だと思います。

- わたしの場合は中学・高校の時から授業方式になれているので、ビデオでの自由な方式には苦手な人です。

でもほかの国の言語を勉強するのはやっぱり会話が重要だと思います。ビデオのように自分の意見を発表しながら自分の実力も上達すると思います。日本語を習うのも難しいけれど自分の考えをほかの人に伝えるのも難しいと思います、ビデオの中の授業ではそれを訓練するのだと思います。

- 自分がテーマをきめて話さなければならない。だから自分が知らない単語とか文法勉強しなければならないですね。そのままだ、あれが日本語教育の基本だと思います。韓国ではこういう方式はちょっとむりだというけど、まあずつとれんしゅうとか、こういうかたで授業するなら、ここでもできるとおもいます。

私がせんせいになるとしたら、きつとつかいます。たいてい、はずかしくてあまりはなさない人がいるかもしれないけど、がんばります。

ソウル 9月3日

■韓国ソウルのサンミョン大学で日本語を教えております。私も「考えるための日本語教育」に似たような授業をしています。「異文化理解のための日本語教育」をめざして日本語で行っております。講義のやり方は次の通りです。

1. Syllabus を読んで生徒は受講を決めて入ってきます。
2. ニーズ分析を通じて教師は講義の運営を調節します。
3. テーマを中心に発表させたり討論させたりします。

「お断り方」「感謝表現」「贈答文化」などやっております。

学生達はこのような発表中心の講義を通じて、自分の意見を発表する力と自分からの発信が可能であることを自覚するようです。時々早稲田のホームページも拝見させて頂きたいと思います。貴重なご講演ありがとうございます。

■今日のセミナーは、今までの言語文化と違った立場からの、個人の考える力を育む教育だと思います。時間の許す限り、韓国へのこういう形の言語文化教育が広まるよう力を入れて欲しいです。お願いします。

■韓国の日本語学院で働いている者です。細川先生の理論・実践授業を楽しく拝見させて頂きました。日本における日本語教育と韓国における日本語教育との差も少々感じましたが、今後の自分の授業に取り入れられたらと思います。ありがとうございました。

■大学の中で日本語教育に当たり、いつも疑問を持っております。とにかく言語表現中心の指導に陥りやすい現実がありますが、本日の細川先生のお話を伺いまして、目からうろこが一つ落ちたようです。今後も注目して、今後の日本語教育に役立てていければと考えています。もっと書きたいことがあります、次回にします。乱筆乱文をお許し下さい。

■ご無沙汰しております。日研2期生の山口です。私はどんな教室を目指すのか、引き続き考え続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

- いろいろと深く考えさせられる機会になりました。教室で何をを目指すか、常に真剣に考えていきます。
- 日本語教育についていろいろと研究されていると思いますが、一番理想的な方法を見つかるってことは本当に難しいと思います。その方法の一つとして、総合的(?)教育も非常にいいと思います。
- 言語教育における文化の取り入れについては、以前から大変興味を持っており、今日のワークショップは非常に興味深く聞かせていただきました。自分の教室の中で総合活動を少しでも取り入れていけるよう、もっと勉強していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。
- 非常に興味ある内容で面白かったです。私も留学したとき、似たような授業があつてかなり準備とか大変でしたが、受身的な授業よりはるかに印象に残っているし、自分の日本語能力の限界や問題点などにも気がつけた授業でした。やはりこのような授業を進行するには、教師側の準備がちゃんとしていないと目的を失った方向性がはっきりしない内容になる場合もあるだろうと思いました。私もこのような授業に興味があるので、さらに勉強していきたいと思いました。ありがとうございました。
- 高校の現場で教えている私には、今日のセミナーはそれほど実感できませんでした。だが、社会と文化を日本語教育に取り入れるというのは新しいメソッドとして思っています。
- 日本語を勉強するということは、ことばだけではなく、やっぱりその国の文化を知ることが大事だと思います。今日、いろんなことをお聞き、これから日本語を教えるときにも学習者に日本について、日本の文化について興味を持たせるように授業をしようと思っています。いい勉強になりました。ありがとうございました。
- 私は高校で日本語を教えている人ですが、今回のワークショップは大変役に立ったと思います。これから学校の授業で必要な部分を取り入れようと思います。次も機会があつたらぜひ参加しようと思います。どうもあ

りがとうございました。

- 統合教育と文化教育の絡み合いに関して、より深い意図を持って取り組むことも考えられるように思いました。しかし、ここ（韓国）での授業では統合的学習に対する機会が大変少ないので、大変ためになりました。ありがとうございました。
- 実践教育といつも話していても、話だけで終わるのが今までの現実でした。今日のビデオを見てできる道を探したような気がします。教える立場でまず「私はどんな教室を目指すべきか」をじっくり考えなければならぬと思います。ただ言語学的に上手にできるだけじゃなくてももっと広い意味での授業をしてみたいです。
- 「どのような教室を目指すのか」は常に考え続けていかなければならないことだと思っています。日々の授業はつつい予定に追われがちで流されることが多いのが現実ですが、今日のワークショップをきっかけとして自分の考えをしっかりとめたいと思います。
- 興味深いお話でした。本当にありがとうございました。チャンスがありましたら、また伺いたいです。
- 自分が持っている授業で総合型日本語教育が出来るのかわからなかったが、今回のワークショップで少し手がかりがつかめたような気がします。ユピキタス講座に参加したいと思っています。今、自分が韓国で感じていることを学生に投げかけて学生も今の情報からテーマをみつけていければいいのではないかと思います。
- 私も是非このような教室活動をやってみたいと思いながら先生のお話、ビデオを拝聴していました。疑問に感じたこと、是非教えて頂きたいことがいくつかありますので、下に書いておきます。

(1) VIEDOの中で「動機が深まらない学生がいる」という場面がありましたが、このような学生の動機はどのように深まっていったのか？グループリーダーや院生たちから何らかの働きかけがあったのでしょうか。

(2) 私も教室活動の中で、グループワーク (Discussion など) を時々、用いていますが、どうもうまくいきません。というのも、活動を見守っている立場の私 (先生) だけを見ながら、話す学生、ほかの学生のコメントには耳を傾けず、私からコメントを待っている学生が多いからです。早稲田の授業の際には、評価のポイントをはじめに提示されているのでしょうか。学生の中には「相手の意見をほとんどうけいれるようにしない」学生もいる (いた) のでしょうか。

6 おわりに——記録編集を担当して

「韓国では無理です。」「ビデオの中の授業は理想です。」「いいなあ〜。」

韓国3都市を巡って行われた今回のワークショップで、講演を聴き、ビデオを見た韓国の日本語学習者の感想は大体上記のようであった。

どうして彼らはうらやましいと思っていながらも韓国では無理であると思うのだろうか。どうしてビデオの中のような授業は彼らに「理想」にしか思いえなかったのだろうか。

それはきっと「自分を表現すること」にあるのではないだろうか。

久しぶりに訪れた韓国で、日本語を専攻している大学生と私は韓国における日本語教育について、等身大でいろいろと話しをする機会が多かった。

韓国の日本語教育事情は私が12年前に日本語を習ったときとあまり変わりがなく、世界でもっとも日本語を学んでいる人が多いと言われている韓国の日本語教育は、ほとんどが文型を教え、その文型を用いて文章を作り、ひたすら口でそれを覚えさせ、日本語で話せるようにすることを目指している。

「あなたはみかんが好きですか。」「はい、好きです。」

日本語教室の中では「～は好きです。」を言えるようになればそれで満足している。しかし、誰も「なぜそのみかんが好きなのか。」とは聞かない。「なぜ？」はない日本語教室で日本語を学んでいる彼らは、ビデオを見て「自分を表現していくこと」は理想であると思い、さらに、それは韓国では無理であると思ったに違いない。私がもし、彼らと同じくビデオだけで総合に出会えたら、私もきっとそう思ったのだろう。

「自分を表現していく」こととは何か。どうして日本語学習者にそのプロセスが必要なのか。私は、「自分を表現していくこと」は「自分を語っていくことである」と思う。それは、人間関係の基本、つまり「コミュニケーション」とつながっていくからだ。

人間とのコミュニケーションの中で自分の表現をもって、自分を語っていくことはとても大事であり、それこそコミュニケーションの意味であると思う。

韓国の日本語学習者にも、彼ら自身が主体となって、言いたいこと、表現したいことを伝える、そして自分を語ってく日本語教室を味わってほしいと、心の底から強く感じた。

注

- 1 本報告の作成にあたり、多大なるご支援ご協力を賜った同徳女子大学の李 徳奉教授、当研究室の細川英雄教授に心より感謝申し上げます。
- 2 2003年の3月に作成されたビデオで、早稲田大学日本語センターの「総合3-7, 8」クラスのものである。週1回, 2コマ続きで(1コマは90分)180分連続の授業である。総13週間行われた。その総合活動型日本語教育では、学習者の興味・関心を、他者そして、グループの仲間との対話を通して学習者自身が言語化し、レポートのまとめていく過程での日本語習得を目的としたものである。